

2023 年度イラン短期研修プログラム報告書

上智大学外国語学部英語学科 4 年

2024 年 3 月

はじめに

2024 年 2 月 10 日から 2 月 22 日まで、笹川平和財団とイラン国際関係学院（以下 SIR）によって開催されたイラン短期研修プログラムに参加した。研修では首都テヘランだけではなくエスファハーンやカーシャーンといった地方都市にも足を運ぶ機会があった。テヘラン滞在時には SIR でのイラン政治・経済に関する講義や学生との交流、在イラン日本大使館、外務省の訪問やテヘラン平和博物館の視察などを行った。さらにエスファハーンでは文化的価値の高いモスクや宮殿といった遺産の見学を通じ、イランが保有する多様な歴史背景を学んだ。

筆者は大学でアメリカ政治外交を専攻した。イランに対し厳しい経済制裁を科しているアメリカと、それに対立するイランという、政治の場において両極の立場にある二か国では、互いの国をどのように意識しているのか興味を持った。また昨年ベトナム戦争証跡博物館を訪れ、第二次世界大戦後アメリカが関与してきた戦争の現実と向き合う大切さを知った。今回訪れたテヘラン平和博物館では、イラン・イラク戦争における化学兵器被害の実態を展示・発信しており、その被害に遭われた方から話を聞くことができた。本報告書では、これらの体験から得た見解を①対アメリカ（西側諸国）への意識と②平和への「諦め」と「希求」の二点から述べる。なお、本報告の感想は個人による見解である。

対アメリカ（西側諸国）への意識

イランに経済制裁を科すアメリカは今年 11 月、自国の大統領選挙が控えている。この選挙結果が及ぼす世界各国への影響は大きく、経済や通商、人の移動、政策が激変する可能性がある。現在も続くウクライナ侵攻やガザ地区で起きている戦闘にも武器の供与や被害者支援といった直接的な文脈で、これまでとは異なる関わり方がとられる可能性もある。選挙結果次第では、2018 年にイランの核問題に関する包括的共同作業計画（JCPOA）からの一方的離脱を宣言し経済制裁をさらに進めたトランプ元大統領の当選も考えられる。

そんな状況下でイランではこの選挙をどう見ているのか疑問に思った。アメリカへの政治的な意識はどれほどだろうか、選挙はどう見ているのかと尋ねたところ、意外な返答があった。外務省アジア太平洋局長 Mohammadi 氏は「(大統領が) 民主党候補だろうと共和党候補だろうと差異はない」と明言し、SIR の教授は「良くも悪くも、この選挙ビジネスに乗る話ではない」と発言していた。イランはアメリカの選挙結果自体を憂慮するのではなく、結果がどうであれイランなりの独自路線を行くという意思表示にも感じ取れた。Mohammadi 氏は「(アメリカがどのような状況になろうともイランは) 生き残る証拠があ

る」と続け、経済制裁や西側諸国からの孤立で「信頼よりも抵抗」する教訓を得たと発言した。渡航前、私はアメリカの選挙結果がイランの考え方にも何らかの刺激をもたらすと考えていたが、それは常にアメリカ（西側）視点で物事を見ているために生まれた考えだったと気づかされた。

そうとはいえ、今回の研修で関わった政府機関に所属する人や将来外交官としてイランの政治を担っていく学生の多くが留学に行くのはアメリカだと判明した。VPN を駆使して規制をかいくぐり、TikTok や X など日本の若者も使うようなアプリを見ている。親族がアメリカに在住する人がいると話す方もいた。また街中を見ると、ファストフードや有名チェーン店に倣った店が多く存在している。

イランが抱く対アメリカ（西側諸国）への意識の根底には、建前と本音が隠れていると感じた。イラン政府とイラン人は違う、ということだ。政治的に対立する部分が多く、アメリカを批判する立場を明確にとる人がいる一方で、実生活には切り離せない実態が存在することがわかった。

平和への「諦め」と「希求」

「真の平和は人間の内部、心の持ち方に起因している」。テヘラン平和博物館の入り口にある平和を訴えるメッセージには一人一人が平和について考え、それを他者へ伝播させる必要があると書かれていた。この博物館は、戦争で使われた化学兵器（主に毒ガス）による身体被害の悲惨さを伝えるために設立され、対話やワークショップを通じた理解の促進に努めている。今回の訪問では、イラン・イラク戦争においてイラク側が使用した毒ガスによって呼吸器系の病気を患い、気管に金属の管を入れている男性と対話できた。彼は40年経った今でも後遺症に苦しんでおり、呼吸をする度に喘鳴がしていた。筆者は広島原爆資料館やベトナム戦争証跡博物館に展示されている化学兵器のおぞましさと似た心情を抱いた。

現実に戻ると、ガザ地区では多くの子どもや罪のない人がイスラエルによる攻撃の被害に遭い、多くの死者も出ているという連日の報道に悲しい気持ちになる。今まで以上に「平和」が希求される時代だと感じつつ、中東地域で勃発する終わらない戦闘の連続に平和は訪れるのかと感じてしまう。Mohammadi 氏は現在の中東情勢について、“peace is far too away from us”（平和は私たちから遠すぎる）と答えた。イスラエルの方針に反対するイラン外務省ならでの回答とも思えたが、きっぱりと平和への諦めを表明した姿勢に衝撃を受けた。解決策はあるのか、と聞いても「そんなものは誰にもわからない」と言及するにとどまった。

日本にいと、社会科見学などの機会に広島原爆資料館を訪れ、平和学習を受ける機会がある。2歳の時に被爆し、短い一生を終えた佐々木貞子さんの話なども有名だ。しかし、イランにはこの化学兵器の被害について教育を通じて知る機会はほとんどなく、教科書にも実態について記載がないそうだ。学ぶ機会がなければ、平和を心に宿しながら大人になることは難しいのではないかと思う。過去の戦争で何があったかを広め、平和のために何を学

ぶべきかを訴えるなど平和のために活動をする人がいる一方、現実的な視座として平和への諦めを表明する人が国を代表する立場にいるということもわかった。

おわりに

イランに滞在したことで、今までに持つことのできなかつた視野を持つことができた。出会った方々は優しく、熱心に街の良さをたくさん教えてくれた。訪れた全ての場所が刺激的で、未知の世界に飛び込むおもしろさを再度思い知った。

筆者は4月からジャーナリストとして新たな道を歩む。人生の転機となるこの期間にイランに訪れた経験は、10年後、20年後でも必ず生きてくるだろうと確信している。たくさんの人に会い、またどこかでイランと関わることができたらとも感じている。

このような機会を与えてくださった笹川平和財団イスラムチームの皆様、SIRの関係者、一緒に渡航し密度の濃い時間を過ごした仲間感謝している。

(なお、本所感執筆者個人のものであり、笹川平和財団の見解を示すものではありません)